



幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園

2003

8

第102巻 第8号 日本幼稚園協会

子育て支援と

柏女靈峰 著

(淑徳大学社会学部教授)

保育者の役割



子育て支援に対する保育所・保育者の役割がこれまでになく強調されるなかで、保育所・保育者はどのような子育て支援ができるのか、あるいはすべきなのか。この本では、子育ての現状を踏まえ、保育所・保育者が取り組む子育て支援の意義と具体的活動のあり方について、さらに保育士資格の法定化を踏まえた「保育指導」のあり方や課題について考えます。

目次

- 第1章 子育ての現状と子育て支援の必要性
- 第2章 子育てニーズと支援の方法
- 第3章 保育所の課題と子育て支援
- 第4章 保育所における子育て支援
- 第5章 保育士資格の法定化と子育て支援
- 第6章 保育所における子育て支援の役割と機能

●保育士資格の法定化によつて子育て支援のあり方を学ぶことが努力義務となります。また現場での手引書として、また保育士を目指す学生に必須となった「家族援助論」の教科書としても活用ください。

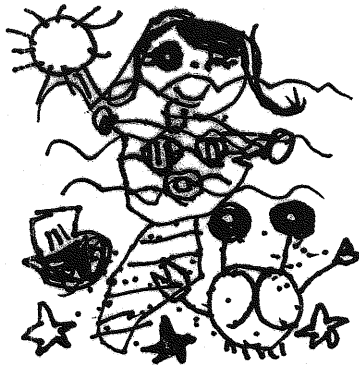
A5判 176頁 定価：本体1,400円+税

キンダーブックの

フレイベル館

幼児の教育

第102巻 第8号



幼児の教育 目次

—第一〇二巻 第八号—

© 2003
日本幼稚園協会

巻頭言 絵本と子どもを見つづけて……………佐々木宏子…(4)

障害をもつ幼児の保育(13)―この子と出会ったとき―

手を使うこと・遊び、描き、造る……………津守 真・津守 房江…(8)

お化けやしき……………清宮 聡子…(13)

せつな系植物楽 植物ぼろぼろ 第二葉 ひょうたん……………群馬 直美…(22)

ポジティブサポートの世界(3)

「その人」の全体像を立体的に考えるということ……………村田 愛…(28)



スリランカの保育者とともに……………馬場 繁子…(36)

手づくり活動の楽しさすばらしさ(5)

笹舟・菖蒲舟・水あそび……………浜本 昌宏…(43)

子どもとの日々のひとり言……………菊地 知子…(44)

特集へ緑蔭図書紹介

あなたがいるってことだけで……………倉持 清美…(50)

『心理学ってどんなもの』『ソラリスの陽のもとに』……………山本 政人…(54)

読書・無限に広がる想像の世界がそこに……………安西 三恵…(57)

三本成夫著『胎児の世界』第Ⅱ章より……………磯貝 文男…(60)

表紙絵／南塚 直子

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット／彌永たたえ「ハート形のイチゴ」

編集委員／田代 和美・高橋 陽子・佐藤 寛子

編集部／仲 明子



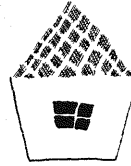
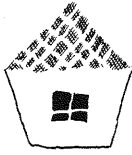
巻頭言

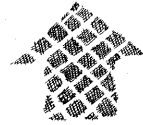
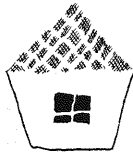
絵本と子どもを見つづけて

佐々木 宏子

読者論の立場から

乳幼児が絵本を読むことの意味について研究したり考えたりしてから、三十年以上の月日が経ちました。最初はごく身近な乳幼児を丹念に観察し、子ども達がどのような時期から絵本に微笑みかけるのか、また、知っているものの認知や命名、感情の発、ひいては言葉や描画、遊びへと相互作用をしつづどのように影響を与えるものなのかを分析してきました。当時は「赤ちゃんに絵本を読ませるなんて」という批判が、かなりあったことも事実です。このような私の研究の視点は、いつの頃からか児





童文学研究者の間で「読者論」の立場とよばれるようになっておりました。今でこそ「赤ちゃんと絵本」は、ごくあたり前のように論じられており、隔世の感がします。「読者論」の立場を引き受けてきて言えることは、子ども達に「良い絵本」や「ふさわしい絵本」は、本当に多様で個々バラバラだということです。読み手との関係、子どもの性格、生育史などにより子どもの絵本への興味は異なり、絵本の選択肢が増えれば増えるほど、私はそこに新しい「子ども」を発見しつづけてきました。

絵本と子育て支援

私が勤務する鳴門教育大学に、地域に開かれた児童図書室を創設したのは、一九八七年の春のことでした。それ以来、本を読む親子の姿はいつも私の周りにありました。最近では、赤ちゃんをつれたお母さんも数多くなりました。生まれて一か月も満たないうちにお母さんと一緒にやって来て、「図書館デビュー」を果たしたお子さんもいます。これは、お母さんが赤ちゃんと絵本を見せようとして連れて来られたのではなく、赤ちゃん連れで受け入れられる数少ない公共の文化施設として、この児童図書室を選ばれたということです。学生達は、妊娠中のお母さんから出産・育児と目の当たりにし、一人の赤ちゃんが育つてゆく過程をつぶさに共有することになりました。誕生し歩き、今では走ることが出来るようになった一人の子どもの姿を追いつつ、絵本が一組の家族の中でどのような役割を果たしてゆくのか、興味深いエピソード

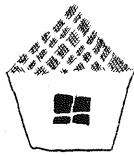
ドが沢山あります。

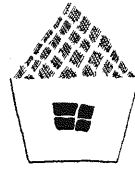
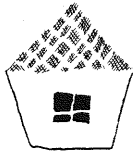
読み聞かせは読書への入り口か？

数多くの絵本を読む子ども達とのお付き合いのなかで、「乳幼児期の読み聞かせは子どもの自立した読書への入り口」という、一見何の疑いもないような言い方に、最近ではあまり説得力を感じなくなりました。もちろん、子どもによっては、そのような将来の読書好きにつながるような「読み聞かせ」経験もあります。しかし、乳幼児期の絵本の存在は、「玩具やテレビ、コンピュータゲームなどと同じような文化的環境の一つです。早くから飛行機の玩具を与えれば、将来パイロットに育つたり、早くからおままごとセットで遊べば家事が上手な子どもになるわけでもありません。それと同じように絵本も多様な文化財の一つなのです。

もちろん、絵本は読み手であるおとなとの人間的な交流を必要としますので、読み合いを通して子どもに深い満足感と楽しみを与えます。結果として、前述したような他の玩具よりも言葉や感情の発達を促すこともあります。しかし、言葉や想像性の発達のごっこ遊びを通してもずいぶん育ちます。

乳幼児期の絵本の読みは、まだ確かな自己と重ね合わせるような強い意味をもってあるわけではありません。自分の生き方にも深い影響を及ぼすような本格的な読書は、一般的には子どものなかに明確な自己が完成し、自らの生き方と重ね合わせるこ





とが可能になる小学校の中学年頃からではないでしょうか。絵本は無性に楽しい時もあれば、単なる暇つぶし、おとなを引き留める手だてになる場合もあります。絵本と子どもの関係は、おとなと読書の関係と同じで様々だということです。

親を育てる絵本の読み聞かせ

子どもに絵本を読み聞かせる時の物理的な姿勢ですが、おとなが子どもを膝に抱き絵本を前に一方向に並ぶやり方は、子どもが幼ければ幼いほどあまり意味がないと思います。なぜならば、読み合うということはお互いが読みを分け合うということです。から、お互いの表情が見えなければ価値が半減するのです。絵本の読み聞かせというと、ごく当たりまえのように「子どもに何をもたらすか」という視点をとりがちです。しかし、私は最近、論理を逆転させ「おとなに何をもたらすか」に興味が移りつつあります。

読み聞かせのとき、絵本のリズムや物語の起伏にあわせて子どもの表情を確かめ、共鳴する読み手もあれば、まるで無表情な人もいます。

あるお父さんは、言葉のリズムにあわせてトントンと子どもの手を握り、身体を揺ります。その一連の動きと流れは、とても美しく見えます。あるお母さんは、絵本だけを淡々と静かに読み、子どもの表情への興味はまるでないように見えます。今しばらくは、このような読み手の表情を見つづけたと思います。

(鳴門教育大学)



障害をもつ幼児の保育(13)

—この子と出会ったとき—

津守

真 (M)

津守

房江 (F)

手を使うこと・遊び、描き、造る

手が使えるようになることは、生活が便利になるだけではありません。手は心に感得している混沌とした自分自身の思いを、外に表す働きをするのではないかと気が付きます。子どもたちは手を使う遊びを通して自分の思いを表現出来、それによって大人に分かってもらうことを知り、やがてものを描いたり造ったりする造形へと広

がっていきます。

本気で遊ぶ幼い子

F 今日遊びに来た一歳五カ月の孫をあなたは随分長い時間、ノートをそばにおいて見ていたけれど、その時の感想を聞かせて下さい。

M 車の大好きなこの子は、長い時間座りこんで車の広告を切り抜いてもらっていました。それを一つずつ手にとつてながめていたのです。前にも話したように、手にもつことによつてそのものは自分に属するものとなり、手にもつことによつて心の中で動きはじめます。自動車を一一つ手に持つて動かすとき子どもの心にはさまざまな光景が行き来しているのではないのでしょうか。前に造つてもらつた段ボール箱の車を引きずつて来しました。

それは母親が造つたもので、子どもが自分でマジックペンでぐるぐるとかいてある。我ながらよくできたと言うように鑑賞して車に乗つてワッフルを食べ、それから手を大きく動かして車にマジックペンでまたいろいろな線を描きました。

F それはノートにも書かれた記録だけだ……。

M 書かれたこと以上に、その情景が目に浮かぶんだよ。

F そう、あの熱気ね。

M 全身で描いていて、手はそのエネルギーが凝縮して先端からほとばしるように見えましたよ。

私は字で書いたけど、幼い子が全身で描いている姿を文字では伝え切れないと思いました。だから、幼い子や言葉のない子は本気で遊ぶ事が大事な表現になるのでしょう。

子どもの遊びの中にアートがある

M 大きな段ボール箱は安定もよくマジックペンとよく合うようですね。

F 愛育養護学校でもいろいろな材料を出しているようですが……。

M お天気の日に庭に絵の具の道具を出したり、特別な紙を出したり、粘土の場を造つたり、工夫をします。描くものもクレヨンやマジックペンやサインペンなどその子の好みや手の力にもよるでしょう。

子どもたちの手で造りたい気持ちを引き出すように、

心を使いながら場所を用意し、材料を用意する。そんな先生がいて、子どもたちは遊びとアートの両方に跨がったような所を生きることになるのでしょうか。

子どもの心の内側にあるまだ形をなさない茫漠としたものが、いろいろな素材に出会って共鳴し、うごきだすような感じがする。形になりにくいけれども心の思いを表現しやすい水とか土とかにすーっと引かれる子もいる。そのことはどの子も共通するものがあると言えますね。

F 本当にそうですね。

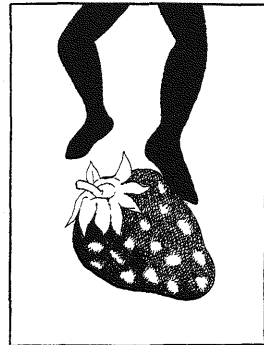
水たまりにどうしてもはいりたかったり、水たまりに映る青い空や、自分の顔に見とれたり、子どもが心を引かれるものは形にならなくても、アートの心があるのだと私も考えてきました。

M 子どものときから本気で遊ぶ生活がどの子にとっても大事ですね。

心の枠をはずすこと

F 子どもによっては自分を縛る枠を強くもっている子もいますが、それをどのように考えたらいいのでしょうか。

M 子どもを縛る枠には、自分自身のなかにあるものと、外側から子どもに向けてこうであって欲しいという親や先生などからの眼差しがあります。外の枠が強いと内の枠も強くなって子どもが自信がもてなくなって、自己表現が出来なくなる。手を使って描いたりものを作る



事も難しいでしょう。まず、自分に自信をもつようになることが大事かと思う。

F そういえば、来たてのころクレヨンを折ったり砂に埋めたりして手を使うことを拒否する子がいて驚きました。大人から期待されてどうせばくには出来ないよとあきらめている子どもの訴えかと思いました。『やらな』ということをやっている』とあなたに言われたことは、子どもを理解するうえで大切なことを学びました。やらされると感じたとき拒否する力があるのは一つの成長のステップと考えられますね。

M 命令や指示で子どもを動かすのではなく、この人といれば安心だという大人に対する信頼感や、この場合はほっと出来るというリラククスした気持ちの中で、周囲にいる大人や子どもが「なにかやっている」おもしろそうだというわくわくした気持ちになるのでしょうか。

形に成らないものをもっと大切にしたいですね。長い年月かかってあのころなんだか分からないけれどやって

いたことが、こういう意味があったのかと発見することがしばしばあります。

たとえば、一人の男の子は、幼児期に箱が大好きで職員室や教材室から集めたり、ゴミ集積所から取って来たり、母親も保育者も本当に困りました。後にその子は自分で蓋付きの美しい箱を作るようになりました。また小学生のころ、ビニールのストローで輪っかを作って遊んでいた男の子も今は青年となって、紙粘土の円盤にいろいろのビニールを埋めこんで次々と造っています。作品は同じように見えるけれど少しずつ変化しているのです。繊細でちよつと臆病なこの人の変化の仕方を、作品の中から私たちは感じ取っています。

F そう、その時にはもう青年期に成っていますが、青年となった人達の造形は興味深いものがありますね。

小さな造形教室を開く

M 青年となった人たちが、集まって描いたり造ったり

する場が出来たらいいと思ひ始めたのはそれぞれに大人となつて作業所に通いだしたころだつたかしら。

F 高等部に通つたり、作業所に行き始めたところかと思ひます。もう愛育は卒業して大人として働くけれど生活のすべてが働くことになつてしまふのでは寂しい気がする、とお母さんたちが考えたり、みんなも考えていました。

心の枠を取り払う時が必要なのは青年となつて働き始めても同じです。

M いや、もつと必要かも知れない。生活の広がりや楽しみを用意するのは、この人たちだけでは出来にくい。

愛育養護学校で美術（アート）を担当していたうちの娘が中心になつてやることになりました。さきに話した孫の母親です。

F ちょうどそのころ、うちでは子どもたちが独立して家を出て行くころでした。割に広い子ども部屋が空いたのでそこを使って、と簡単に決めてしまいました。そ

れから十年も続くとは思つてもいませんでしたよ。月一回ですがみんなの興味をひくような材料を用意し、場をもり立ててくれる人がいたから出来たのです。

この年齢になると描いたり造つたりが好きな人が、一人ではなく集まつてやるのがとても楽しいようなのです。教える人ではなく一緒にやる人がいてくれるのです。十二、三人くらい集まりますが、障碍のある人は数人です。

お化けやしき

清宮 聡子

二〇〇三年の三月、担任をしていた子どもたちが卒業した。振り返ると、年長児との一年は子どもたちの豊かな発想、イメージを実現しようとする思いに、今まで以上に圧倒されることが多かった。

妖怪図鑑

梅雨に入った六月の月曜日、保健室で、一冊の絵

本に頭を付き合わせて見入っているY夫とT夫がいた。何を読んでいるのかと思ひ、覗き込みに行つた。真剣な二人の手元には、『少年少女版 日本妖怪図鑑』岩井宏實（文）川端誠（絵）があつた。「ようかいずかん」というと、なんともおどろおどろしい響きなのが日本人が語り伝えてきた妖怪についての絵本である。時折、言葉を交わしながら絵

本を見るY夫とT夫を微笑ましく思いながら、私はその場を離れた。

しばらくして、クラスの前の廊下にY夫とT夫が絵本を床に開いて見ている姿が目に入った。二人は場を移し、絵本を見ていた。そしてその傍らにはクレヨンと紙があった。その様子から、「妖怪」を自分たちで描こうとしていることがわかった。私は、保育室の小さな机を廊下に出し、そこで描いてはどうかと、二人に声を掛けた。二人は「そうしよう」という感じで、机を運び出した。今度は二人に本の内容を聞きながら一緒にページを繰った。様々な種類の「妖怪」について、その呼び名の由来など、どんな行いをする妖怪なのかを書いてあった。主に絵を見ながら読み進めていた二人であったが、T夫が、「ほらほら」と言って、私に「海底(うなぎ)の怪」について書いてあるページをしめし、「先生こんなお化けが居るんだよ」と話し始めた。そし



て、「海難法師(かいなんほうし)」という妖怪についての文章を読んで欲しいと言った。読み終えると、T夫は「僕これ描こう」と言ってみてクレヨンを手にした。T夫に呼応するかのようには、Y夫は、「僕、一つ目小僧を描こう」と言ってみて、先程見ていた「一つ目小僧」を思い起こしながら、画用紙に向かった。

“お化けやしき” やろうよ

「妖怪」を描き始めた二人に気が付いた、D夫と、R夫が何をしているのかと見に来た。「妖怪図鑑」を目にした二人は気持ちが悪くなったのか、クレヨンを各々の引き出しから持って来た。私は四人には机が狭いと思い、保育室からもう一つ机を運んだ。早

速、D夫とR夫は本を見ながら、一番心引かれる「妖怪」を探し始めた。

四人は机を囲むようにして絵を描き始めた。「色んな妖怪がいるのねえ」と私もその絵本に感心しながら目をやった。描く手を止めたY夫が「ねえねえ、お化けやしき」やろうよ」と三人に投げかけた。D夫とR夫は、「いいね、いいね」と口々に答えた。T夫は「じゃあ、僕いっぱい描こう」と答えた。突然の提案であった。しかし、それぞれの表情には、お化けやしき実現に向けての意欲が現れていた。

再びクレヨンを持つ手に力が入る四人であった。まずは、お化けをたくさん作ることが必要であると考えた子どもたちに、どのような声を掛けようかと思つた。机に向かう四人から、ふと視線をはずすと、少し離れたところからE夫とK夫が、こちらを見ていた。

「一緒にする？」と二人に声を掛けると恥ずかしそうに微笑みながら、頷いた。二人とも普段、絵を描いたりすることを好んでするような人たちではない。彼らが興味を示し、自分たちもやってみようと思つたことが嬉しく感じられた。クレヨンを持つたE夫とK夫が加わり「お化けやしき」の話が進み始めた。Y夫は描いたものをお面にしてかぶり、お化けになろうと皆に言つた。描いたものを身に着けるというアイデアは採用され、この日は絵を描く作業を進めるところで一日を終えた。それぞれ描いたものは大切に引き出しにしまわれた。

コート室にて

「お化けやしき」をする上で、どの場をお化けやしきの空間にするのか、ということは子どもたちと共に考えなければならぬことだと思つた。

「雪女」を描きたいと言つて、M子も加わつた。メ

ンバーを増やしながらお化けやしきの「小道具」を作り続けるY夫やT夫たちに「お化けやしき」はどこですか?」と尋ねると、T夫が「コート室に決まってるよ」とあっさりと答えた。Y夫が「お兄さんたちがやってくれたでしょ、前に」と続けて理由を加えた。「コート室」とは、着てきたコートや、持ってきた鞆をかけたなり、置いたりするコート掛けや棚が壁際に並んでいる部屋である。出入り口は一箇所で、一時的に電気を消しても支障が無い部屋でもある。適度な広さのあるこの部屋は、確かにここ数年お化けやしきをする場として使われている。子どもたち同様に私も「コート室」をイメージしていた。このやり取りから「お化けやしき」というものが、子どもたちの中で、お兄さんやお姉さんたちがやってくれたこととして残っていることが伝わった。自分たちが体験したことが基盤になっているのだと改めて思った。

コース作り

いざ、コート室に場を移してということになった。お化けが隠れるために必要と考えて、衝立を保育室から持って移動した。Y夫とT夫がまず、出入り口付近に衝立を置いた。衝立を置いただけでは変化が出ないのではと思ひ、私は入ってきた人がどう進めばいいのかという事を考えてはどうかと提案した。R夫は「積み木を使ったらいいんじゃない」と言いながら部屋を眺めた。

そのそばで、既に「雪女」に成りきっているM子が声を出しながら動き回った。そんなM子を見てR夫は「もう、M子やめてよ」と少し苛立った口調で訴えた。M子も負けずに、「いいじゃない、べつに」と言い返す。こうなるとお互い引けなくなってしまう。M子は、お化けやしきを構成していくということには気持ちが向いていない。お化けになって動く

ということが彼女のお化けやしきへのかかわり方なのだと思つた。それぞれのかわり方は尊重されるべきだが、まだ、お化けやしきの枠が形作られていないところでは、勝手な行動と受け取られてしまつても、仕方が無い。「コースを考えているから、一緒に考えましょう」と提案してみたものの、M子は「お化け作りの続きをするからいい」と言つて、保育室に戻つてしまつた。本当は二人が折り合いをつけて、一緒に出来ればと思ひながら、私は後を追えなかつた。まずは、お化けやしきの枠を少しでも目に見えるものになければと思つた。それが、後でM子をスムーズに迎え入れることに、繋がるのではないかと考えた。残つたR夫は再びコースを考え始めた。

Y夫とT夫は、小道具の準備に夢中になつてゐた。R夫に「まずは積み木を運んでみたら」と声を掛けた。Y夫やT夫には後で声を掛けることにし

て、二人で保育室から積み木を運んだ。それを並べ始めたR夫を見て、Y夫やT夫らも積み木をどう並べるかを考え始めた。しばらく色々々に並べてみたが、あまり複雑には出来ず、行く道と帰る道というようなシンプルなコースになつた。しかも、部屋の奥まで届かず短いものになつた。三人にとっては、それで充分なようであつた。

小道具いろいろ

前日はコース作りで終わった「お化けやしき」であるが、この日はお面の他に、色々な小道具が完成した。「火の玉」をT夫が、絵に描いた。私はそれが空中に浮かぶようになったら面白いのでは、と提案してみた。するとT夫は何か吊るして動かせば良いと考えた。紙を細く丸めて棒状にした物に黒い糸で吊るすことにした。それを衝立の後ろに隠れて揺らすと、紙に描かれた「火の玉」が揺れた。その

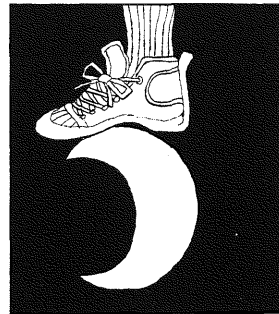
様子をY夫やK夫、R夫たちは嬉しそうにみた。この小道具に刺激を受けたのか、R夫は「傘お化けを作る」と言って保育室に戻った。R夫は、大きな模造紙に傘お化けを描いた。それを長さのある少し太い角材の棒につけて、衝立の後ろから操作できるようにした。

Y夫は自分も、衝立の後ろから操ることのできる道具を考えたいと私に言ってきた。紙のほかに何か使える材料はないかと考えた。揺れ動いて雰囲気の出るものとして、ずずらんテープを思いついた。Y夫にこういうものも使えるのではと渡した。長めに切ったものを束にして先を結び、更に一本を細く割くことでボリュームを出した。それを、竹の棒の先につけた。棒を手にして振ると、バサバサと音を立ててずずらんテープが踊った。衝立には黒い紙を張った。そこに、絵に描いたお化けを幾つか貼り付けた。小道具を考える過程はお互いのイメージを確

認し、また新しいことや考えを生むことに繋がったように思う。

スフィックスお化けになるT実

お弁当を食べ終えて、午後も「お化けやしき」をしようと、Y夫、R夫、D夫、T夫らがコート室に集まった。そこに、T夫と親しいT実がやって来て一緒に「お化けやしきをやりたいと話しかけてきた。コート室で「お化けやしきをやるう」として」ということはクラスの人たちにも浸透していた。T実



はどんなことが始まるのかという期待感に満ちた表情で、Y夫やT夫らに、「T実ちゃんはどうなのよお化けになればいい」と聞いた。Y夫が「T実ちゃん、スフィックスのお化けになってよ」と答えた。「なぜスフィックスが登場するのだろう」私は意表をつかれ、思わず「どうしてスフィックスなの？」とY夫にたずねた。「えつ、ピラミッドにいるんだよ」と答えが返ってきた。徐々に様々なイメージが交錯し始めているのだと思い、それ以上問うのは止めた。Y夫はT実に「僕が手をたいたら立ち上がるんだよ」と提案する。T夫は、白い紙を二枚細長く切ったものを手にコート室に戻ってきた。そしてその紙をT実の両耳の横につけた。T実の顔つきが徐々に変わっていった。動きまで指示をされてすっかりなりきり始めたのか、妙に無表情な「スフィックスお化け」になっていった。Y夫とT夫、R夫たちは、今度は自分たちがどんなお化けになるかを考

えて動き始めた。こうして、新たなメンバーを加えながら午後の時間は過ぎていった。

月曜日から始まったこの活動も気が付けば木曜日を終えようとしていた。その持続力に驚ろかされる毎日だった。同時に、子どもたちと一緒に少しずつアイディアを出し合い、形にしていくことがとても楽しく感じられた。

動き始めたお化けやしき

金曜日。朝から準備が始まった。作った物を運ぶ。いつの間にか衝立が他のクラスからも借りられていて、数が増えていた。効果音として他のクラスの先生からお借りし、録音した「お化けのおんがく」のテープを子どもたちに聴いてもらった。なんとも言えないおどろおどろしい雰囲気を出すこの音楽は、この幼稚園の「お化けやしき」に使い続けられてきたものである。この音楽のおかげで、一瞬の

うちに薄暗い空間が「不気味な」空間に変化するほどの威力を持っている。

思い思いのお化けになった、Y夫、R夫、K夫にT夫、T実やM子たちも準備を整えた。音楽をかけ、お客さんを待つ。いつ始まるのかと期待してくれている年長児のH子や、隣のクラスのエ子たちが何人かを連れ立ってやって来た。恐る恐る入る人たちを思い切りよく驚かすお化けたち、たちまちコート室に「キヤー」と言う声が響いた。声を上げながら飛び出すお客さんたち、年中児も騒ぎを聞きつけてやってきた。私は出入り口に立ち、入る人と出てきた人に対応することにした。しばらくすると、その役割が必要だと感じたのか、Y夫はお化けになるのをやめた。そして、案内役をし始めた。お化けになりながらも、全体の様子に目を向けているY夫らしい選択だった。動き始めた「お化けやしき」はお化けになる側と驚かされる側の存在が明らかになる

ことで、より生き生きとし始めた。

支えられ、広がり、伝えられる

週が変わったの月曜日、先週の金曜日に動き出した「お化けやしき」にお客だったH子が「雪女」として参加することになった。白いナイロンの布を見せると、最初少し戸惑っている様子であったH子の表情が明るくなり、「私やる！」と元気に言った。白い布が「雪女」のイメージに繋がったのだろう。その様子を見て、最近H子とよく遊んでいるK子も「やりたい」と言って来た。M子を含め三人の「雪女」が誕生した。R夫らも、自分たちとは趣の違うお化けが増えていくことが嬉しい様子であった。コート室は廊下を挟んで、年少児の保育室の向かいに位置している。小さい人たちへの影響が気になってきたが、担任の先生方は、さりげなく、この活動を支えて下さった。年少さんは、年長の子ども

たちからするとかっこうのお客さんとなる。「お客さん」の存在は活動が盛り上がるためには欠かせない要素でもある。「宣伝に行こう」という時は、必ず年少児のクラスへ出向くのである。そこで、担任

の先生方が子どもたちと一緒に応じてくれることで、情報がしっかりと伝わる。これは、年少児に限ったことではない。また、担任以外の保育者も子どもたちが活動をより広げ、深めていくことが出来るように様子を見ながら関わる。例えば、お化けの動きが過ぎないように声を掛けて下さったり、入り口を覆う布を取り付けて下さったり、もちろんお客さんとしても子どもたちと一緒に楽しんで下さる。様々な人が関わることで、子どもたちの動きや活動そのものも、洗練されてくるのだと改めて感じた。

この事は、特に今回の活動に限ったことではないのだが、毎日少しずつ作り上げていく流れになった

「お化けやしき」においては、とても重要なことであつたと考えられる。

繰り返し返されるお化けやしき

少しずつ形になった「お化けやしき」はその後、子どもたちの気持ちが向くと繰り返し返された。年中組の人が混ざったり、年少組の人が始めたりもした。子どもたちは「お化けやしき」を、やり伝える“のであろうか。「お化けやしき」の文化のようなものが、そこにあるような気がする。

衝立の陰に身を潜め、息を潜める。お化け同士で無言の合図を交わす、その瞬間の何とも言えない緊張感を私は忘れることが出来ない。子どもたちにとって、そんな感覚が残っているのだろうか、「妖怪図鑑」を手につと、思った。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

せつな系植物楽しよくぶつがく
植物。ぼろ。ぼろ



絵・文 群馬直美

牙ニ葉ひょうたん

一生懸命目を掛けていた実よりも、全然目を掛けていなかった実が、不思議と大きくなる。

だから「ヒョウタンは、見たら生ならない」

そう聞いて、ほったらかしにされてスクスク育つ「野生児ヒョウタン」と思い込んだ。そのイメージはいつしか、「野生のヒョウタン」に

姿を変えた。これが始まりだった。ヒョウタンおばけの…。

夏たけなわ。友人Sと私は、山の中の観光地にあるマツチ絵画家T太郎さん宅を訪れた。話し上手のT太郎さんは、海軍時代のこと、絵の

こと、食べ物や生活の話なんかを、風に揺れるクスノキの葉のざわめきのように、語り聴かせてくれる。半年ぶりに会ったその人。話さない、ごはんも食べない、絵も描かない。死ぬことばかりを考えて生きていた。どんな言葉も届かない。倒れかかったクスノキを囲んで、奥さん、息子のK太くん、友人Sと私、みんな萎れた。

うだる暑さの中。観光客とそぞろ歩き、小さなお寺に詣でる。賽銭箱に小銭を投げ入れ、鐘をゴンゴン打ち鳴らし、両手を合わせる。知らない人のお墓、道端のお地藏さま、白く凍った生ビールのジョッキにも。指で書く「Tタロウサン、元氣ニナレ！」。

トウモロコシ畑の奥で、おばけヒョウタンと出遭った。杉の木の落とす怪しい陰の中、一メートルはあるヒョウタンの実が、ゆらゆらい

くつも揺れていた。眩い命の輝きが、ゆらゆらゆらゆら：ヒラメイタ！ T太郎さんにプレゼントしよう。

初めての経験だった、誰かのために実を採るのは。どきどきした。あまりの大きさに採るのを一瞬ためらったが、「T太郎さんのためならエーンヤコーラ！」命のつまったヒョウタンの実を、爪の先を真緑色に染めながら、ひきちぎった。

にこにこしながらT太郎さんに差し出すと、半歩退き、世にも恐ろしいものを見る者の顔つきになり、「悪いことをしたあ：」声を震わせ、「これは、売り物だ。ヒョウタンに、野生はない！」

知らなかった！ ヒョウタンは、人が種を蒔かなければ生えてこない植物だったとは！

それから私は、ヒョウタンのヒョの字を見るのも聞くのも嫌になった。

T太郎さんとおぼけヒョウタンが、柳の木の下でゆらゆら青白く揺れている。ゆらゆら、ゆらゆら、オイデオイデ……。ヒョウタンおぼけにとりつかれてしまったみたいだ。今ごろT太郎さんは、おぼけヒョウタンの重さに耐えかねて……。

旧友から、マッチ絵展の誘いがあつたのは、そんなとき。T太郎さんが長年描き続けたマッチ箱が、ヒョウタンおぼけから救い出してくれるような気がした。

構想から一ヶ月。試作品が完成した。白い小箱に納まったマッチ箱。小箱のふたには、『あなたの心に火をつける 発破マッチ』のラベル。ふたを開けると、可愛らしい葉っぱの絵のマッチ箱。T太郎さんに捧げる作品なのだ。ア

トリエに遊びに来た友や仕事関係の人に見える
と、「これは売れる！」。それからひと月かけて、
大量生産に……といっても、手作りなので七十個
くらい……。こうして、ヒョウタンおぼけは、ゆ
らゆらゆらゆら、少しづつ遠のいて行つた。

そんな或る日、叔母からヒョウタンが届い
た。『ひょうたんを楽しむ』と題されたテキス
トブック付き。パラパラめくっていると、こん
な走り書きが目飛び込んだ。

「つるが青い内は、しゅうかくしない。枯れて
から」

ああ……と思つた。悪いことをしたあ。全身の
血液が逆流し始めた。極度の罪悪感で頭がくら
くらした。必死に『ひょうたんを楽しむ』を読
んだ。そして分かつた収穫時期とは！

「蔓や葉が黄色くなった頃。果実の肌は白くな
り、幾分軽くなった感じとなる。初めての人



ひょうたんオバケを



GUM, 羊

作ろう!

昔は、いろんなところにオバケをいれは、ネ申さまいた。
 オバケは 恐ろたけど、コワイネ申さまのような気もした。
 今は、オバケもネ申さまいないのかなあ……
 それぞれの心の中に、どんな オバケネ申さまが
 いるんだらう?

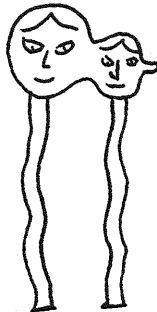
オバケ
 味のネ申さま
 ロボット
 トラ



ちよとコワイ
 ムンクのロウタン
 ヒョウタン



オバケ
 のネ申さま
 ヒョウタン



ネ申さま
 のネ申さま
 ヒョウタン



空とぶヒョウタン



口だけヒョウタン?
 口さけヒョウタン?



ネ申さま
 のネ申さま
 ヒョウタン

は、葉が枯れてしまう直前まで成らせておくのが、無難である」

目の前が真っ白になった。あの時、ヒョウタンの肌は青かった。ずいぶんと実も重かった。葉っぱも蔓も青々とピンピンしていた。ということは……ヒョウタン泥棒のみならず、ヒョウタン殺しまでしてしまったことになる！

幼稚園では、ヒョウタン栽培は格好の教材になるのだと聞いた。

育てた実を加工して、世界でひとつだけのヒョウタンの入れ物まで作れるからかな、と軽く思っていたけれど、今やっと、その意味が分かった。……種蒔きから発芽。やがて花が咲き、実り、熟す。ここまでだったら、他の植物でも体験できる。重要なのは、その先……実を採るためには、“枯れ”を待たなければならない。

力強く生長した蔓や葉や実が、徐々に色あせ弱々しくなつてゆく様に、みんなで立ち合う。

ヒョウタンは、誕生から死まで、その全てを見届けた者にしか、我が子を委ねない。酸いも甘いも知り尽くした植物なのだ。

子どもたちは、ヒョウタンの枯れてゆく姿に、何を見るだろう？ 感じるだろう？ 生命の神秘、夢と現実の共存……？ なんと深い

「ヒョウタン教育」！

ヒョウタンの原産地は、アフリカといわれ、太古の時代に、この地球上に広まった。縄文の遺跡からも、ヒョウタンの種や器に加工されたヒョウタンの実……。近所のお蕎麦屋さんにも！七味の入ったヒョウタンを見ると、未だに、穴があつたら入りたい心境になる。

私も、「ヒョウタン教育」を受けていたら

なあ。：ゆらゆらゆらゆら、今もヒョウタンお
ばけが揺れている。

ヒョウタンから駒！を夢みて、『発破マッ
チ』を丁太郎さんに、贈った。

(葉画家)

読者プレゼント

本文中に登場した『発破マッチ』を五名の方にプ
レゼント！

ご希望の方は日本幼稚園協会まで往復葉書にて八
月末日までにお申し込み下さい。



「その人」の全体像を

立体的に考えるということ

村田 愛

理解されずに月並化してゆく「自己決定」

この何年か教育や福祉に限らず政治の世界でも「自己決定」や、「主体性」の大切さについて語られることが増えたように思います。もう、それらの言葉が日常的に使われ一般的にも通じている錯覚におそわれま
す。「自己決定」や「主体性」という言葉が容易に使

われているけれど、実際その言葉の意味について本当に理解されているのでしょうか。通じているような気がしているけれど、その意味や内容の共通理解は、どの程度できているのでしょうか。「思想レベル」や「行動レベル」として本当に受け入れられているのでしょうか。都合よく、今の風潮としてその言葉を使い分けているだけではないのでしょうか。

今年（二〇〇三年）の四月一日より、支援費制度が始まり障害を持つ人を取り巻く福祉制度は、ひとつ大きく変わりました。ヘルパー資格を持つ人が、高齢者だけではなく障害のある人もケアするようになりました。自明のことですが、高齢者へのホームヘルパーは「高齢者」への介護を専門に学び、行ってきた人達です。「障害者」とは接したことがないという人達がほとんどなのです。「人」へのサービスですから、高齢者でも障害を持つ人でもその土台となる考えや姿勢は共通するものが多いかとは思いますが。ホームヘルパーを派遣する各事業所では、支援費制度参入にむけて障害を持つ人への対応・ホームヘルプについて自主勉強会が多く行われたようです。

その種の自主勉強会に参加した人から聞いた内容に私はショックを覚えました。勉強会では、障害を持つ人へサービスを提供していく為の“心構え”として「障害」についての本を読んだり、障害を持つ人の生

活を映し出したビデオを見たり、作業所で働く指導員の人から話を聞いたりしたそうです。

勉強会の中では、サービス利用者（障害のある人）の「自己決定」と「主体性」の大切さも触れられたといえます。その指導者も常々利用者の「自己決定」「主体性」を尊重し、その人それぞれの「自立」を援助していくことこそ、ホームヘルパーにとって一番大切なサービス提供の姿勢だと説いていたそうです。サービスの利用者が主体的な立場であることが大切であり、その人がどの様なサービスと内容／方法を求めているかを考えていくことが重要だということを話し、そして最後に質疑応答の時間になったそうです。その時、参加者（ヘルパー）の一人が、「障害を持つ人とは関わったことがないけれど、あと二ヶ月もすれば



ば、障害を持つ人のヘルパーとして働くことになって
います。特に知的障害のある人との関わりを考える
時、どのように関わっていけばいいかわからない。相
手のニーズに合ったサービスをというけれど、果たし
て相手のニーズを自分達は理解することができると
か。そして、こちらの意思・意図を相手に伝えること
ができるのか」と質問したそうです。そこで、そのヘ
ルパー達の指導者に当たる人が、こんな言葉を返した
そうです。「愛の手帳（療育手帳）で知的障害が一度
（最重度）と認定されている人の場合、よくて二、三
歳くらいの知能しかない人達なのです。あなたは二歳
の子どもに難しいことを伝えようとは思いませんよ」
と答えたそうです。そしてその勉強会は終わりの時間
になったそうです。

この話を聞いた時、私は血の気がひいていくような
感じがありました。

知らないから教えて欲しいと質問した人の心の中

に、その「答え」がなんの違和感もなく浸透し、もし
かしたら、その勉強会から持ち帰ったものは、その
「答え」だけだったかもしれません。だからこそよけ
いに、その指導者は恐ろしいことをしたと思います。
指導者という立場にある人はその場では力があり、時
にはその人が述べることが聞いている人にかんりの影
響を及ぼします。ある程度の情報や経験がなくては、
その場での情報に対して矛盾や違和感さえ持たずに、
純粋にそんなものかと思ってしまうこともあると思っ
ます。

私はこの指導者が説く利用者の「自己決定」「主体
性」の尊重が、どれだけ意味あるものとして実行され
ているのか疑問を抱かずにはいられません。その人が
生きてきた人生、数々の経験、その人を取り巻く環境
に思いを馳せることなく、ただ二、三歳程度の知能し
かない人なのだと思いつけて接している相手の自己決
定を、どこまで本当に考えられるというのでしょうか

か？ この指導者は「最重度の知的障害Ⅱ二、三歳」と返答したことによって、自身がモットーとしている利用者の自己決定や主体性の尊重を自ら打ち崩してしまつたように私は感じました。

人の捉えかた／あり方

「障害」という言葉には、社会的に固定観念や差別、そして先入観を持たせる要因があるように感じてしまいます。それをできるだけ無くしていくことが福祉に携わる人間の大きな役割だと私は考えています。実際に障害を持つ人と関わり、固定観念や差別や先入観を、実体験をもつて否定していくこと、「その人」のあるがままをまわりの人達が再認識していくきっかけづくりを日常生活の中でしていくことが重要だと思えます。

ところが、その勉強会の指導者という立場を持ってその人が、何もわからないので教えて欲しいという人

に、ある固定観念を強く植え付けてしまつたように感じるのです。その人の答え、「最重度の知的障害Ⅱ二、三歳」こそが差別や偏見を生む根源と考えられると思えます。

なぜなら、知的障害があるということでも「人」をひとくくりを考えることを促すような返答をしたからです。人をひとくくりになると、「その人」のことが見えなくなるでしょう。ひとくくりにするということとは、知的障害が「その人」の全体像を見えなくする壁となり、「その人」はその壁の後ろ側に置かれてしまっています。そして、その指導者の返答は、その壁を分厚くしてしまつたかのようです。

知的障害があろうと無かろうと、それぞれの人達にはそれぞれの個性と人格があることは言うまでもありません。そして、知的障害がある人にもあたりまえですが、「その人」が生きてきた歴史があります。二十歳を超えた人にも、それだけの経験があり、その間に

育ってきた人格、関係、価値観、社会性があり、もちろんプライドもあります。その人が知的障害をもっており愛の手帳に最重度と認定されているからといって、まわりの人が三歳児のように「その人」に関わったらどうでしょう。それで「その人」と健全な関係が築けるわけではありません。

ポジティブサポートは、固定観念や先入観に縛られることなく、「その人」はどんな人かを考えながら、「その人の全体像」を捉え直していきます。ここでは、人の全体像を捉え直すことの重要性や、それをしていく土台となるポジティブサポートのセッション（実際）のあり方を紹介します。

ポジティブサポートの特徴的な部分

ポジティブサポートでは、まず、第一に可能性と個性に焦点をあわせてセッションを行います。その中

で、対象となる人の多面性を見つめ直し、その全体像を認識することから始めます。すなわち、その人が置かれている現在を捉え直していく過程・作業を大事にしていきます。

第二に、「その人本人」の参加に重きをおきます。「その人」のことや「その人の生き方」を考え、将来ヴィジョンを創るということは、その人本人にとって重要なことであり、その人の思いや望みが尊重されるべきものだと思えるからです。ポジティブサポートは、自主参加が基本なので、参加の強制はしません。が、セッションを行う場所・時間帯などを考える時、どうすれば「その人本人」が参加しやすいか、ということをまず考えます。

第三に、参加者全員が対等であり、尊重される場です。ポジティブサポートの場は、話し合う場でも意見を言い合う場でもありません。つまり、参加者の発言は誰かに何か言われることや質問される場ではありません。

せん。だからこそ、対等な場ができ、それぞれが安心して発言できるとも言えるでしょう。そういう形で参加者全員が尊重されます。

ポジティブサポートの踏む段階／過程

ポジティブサポートにはいくつかの段階があります。まず、「その人の立場に立ってみる」ことから始まります。そして、その人の置かれている現実を見直すところから始まります。実際は、その人にとって現在のその生き方がどんなものか、その人にとっての生きる意味における優先順位はどんなものなのか、その人が何を必要としているのか、どうしたらその人にとってより満たされるものになるのかを、その人本人と一緒に考えていくものです。そして、このセッションを続けながら、「その人」にとって望ましい将来のビジョンを、「その人」を含む参加者全員で構築し、共有していくことを目指します。

ポジティブサポートのセッション

実際のポジティブサポート（セッション）の行われ方としては、その中心となる人に関わる人達が「その人」と共に集まり、輪のように席につきます。そして、セッションが始まります。まずファシリテーターが課題を提示します。その課題は、具体的なその人の現実に関ざったもので、例えば「○○さんが好きなこと・得意なこと」、「○○さんが嫌なこと・苦手なこと」とか、「○○さんが選択していること」・「他の人が選択していること」といったものです。このような課題に基づいて、その人の視点に立って参加者がひとり一人順番に発言していきます。つまり、セッションの場で、参加者は自分のその人とのかわりや生活を振り



返ります。そして、それぞれの立場で育んでいる関係から見えてくることや感觸を、言葉にしていくなのです。発言の一つ一つは、壁一面に貼られたカレンダーサイズの紙に、書記によって書き出されていきます。また、異なる立場・関係から見た他の人の発言も聴くこととなります。その中で、参加者は新たな視点に気づいたり、自分の考えを捉え直したりし、対象となるその人の全体像が広がりを持つて見えてきます。こういったセッションの過程を土台として、その人の現在と将来を繋げ、能力や可能性を生かした将来のビジョンを本人と参加者が協力して作り上げていきます。

ポジティブサポートを継続する意味

先に述べたようにポジティブサポートにはいくつかの段階があり、それぞれの段階をセッションを継続することで、ていねいに行うことに意味があると考えま

す。その人から見えている現実が周囲の人達が知っている現実と違うことや、その人との関係性における距離感が見えてくることも多いようです。各セッションで浮き彫りになるその現実とその意味合いを捉え直すことにポジティブサポートを継続する意味があると考えます。

ポジティブサポートが目指していること

ポジティブサポートは、「自己決定の促進」と「尊重しあい共に生きる」ことを目指しています。誰でも、自分の人生に「自分が生きている感覚」を持つことが必要です。例えば、共同生活の中で限られた選択肢しか存在しないように見えても、その選択肢を知らされているのと知らされていないのでは大きく違います。ポジティブサポートは、「可能な限り「選ぶ」感覚を大事にすることと、望ましい選択肢を少しでも多くつくり出していく環境づくりに力を発揮できると思

います。

その人の全体像

人にはそれぞれ個性があり、それぞれの夢があり希望があります。ポジティブサポートは、それらが尊重されそれぞれの人が「自分らしく生きている感覚」を持てる環境づくりを目指しています。「その人らしく生きる」ということを考えるには、共に生活を創る人々のその人に対する理解が、「その人の全体像」にできるだけ近づいていくことが不可欠だと思います。そして、それはその本人にも同様だと思います。また、自分のことをまわりの人達がどのように理解しているかを聴くことで、自分をより理解できる場合もあると思います。

できるだけそれぞれが持つ枠をはずし、フィルターをはずし、その人を理解したいと思う気持ちを持ってその人に接することでもうすに関係は変わっている

でしょう。つまり、セッションの中で、すでに関係は変わっていると考えられると思います。変化し続けるその人の現実を共に認識しながらセッションを継続するということは、それこそ現実を将来につなげる行為、現実から将来へ共に歩んでいると言えるのではないかと思います。

私が考えるポジティブサポートの魅力は、人、そして関係性は、変わり続けることが自然だということが土台にあるように感じます。それぞれの個性を大切にしその人の全体像を立体的に考えていくと、自然とその人の夢や希望が叶えられる生活をまわりの人達も望み、実現することに気持ちが向けられるようになります。セッションを行っていて私は感じます。そして、人の夢も希望も、時が流れると共に変わります。実際に、それらが叶うことよりも、それをまわりに受け入れられることに、人はまず喜びを感じる存在であるように思えます。

(ポジティブサポート研究室主宰)

スリランカの保育者として

馬場 繁子

スリランカ

スリランカはインド洋に浮かぶ「真珠」とも「牛のよだれ」とも呼ばれますが、九州をひとまわり大きくした位の南アジアに属する島国です。セイロン紅茶や宝石の国という御存じの方も多いかと思います。亜熱帯のこの島では果物も豊富にとれ、王様の時代から食べ物には困らず、手を伸ばせばなんでもあるので、みんな怠け者になってしまふんだよ、という昔話があ

るほど豊かな国です。

私はこの国の幼児教育に関わってから十八年になります。「どうしてスリランカなの？」というと、ネパールの幼稚園での経験を生かしたくて、青年海外協力隊に参加したのですが、当時ネパールからの要請はなく、たまたまスリランカになったというだけのことです。派遣先は中流以上の家庭の子どもたちがやってくる立派な幼稚園でした。私の想像とはまるで違う世界でした。しかし、都市の貧困者家庭やほとんど情報

の入らない地方の現状を知るにつれ、この人たちとともに働きたいとおもい、帰国後にNGO (Non Governmental Organization) スランガニ基金を作りました。任地以外の状況を知りたくて低所得者層の住む地区を歩いていたとき、子どもたちに家屋の一部を開放し、読み書きを教えていた保育者に会いました。この人がスランガニ・ルピカ・ラナシンハさんです。スランガニ基金はこの小さな幼稚園の支援からスタートしました。

この幼稚園はコロンボ郊外のペーリヤゴダ地区にあります。低所得者層が住むこのあたりは栄養失調の子どもたちも多く、おやつにミルクを出していました。建物は雨漏りがひどく雨の日はお休みでした。その場しのぎの応急修理をくり返しても限界があり、一九九二年に建て直しました。この頃から、ゆつくりと地区全体の環境も改善され、定職に付く父母も多くなり生活が安定してきたためか、栄養障害の子どもは少なく

なりました。もちろん、麻薬やアルコール中毒という問題はいまだに続いています。熱心な保育者と協力的な父母がこの幼稚園を支えて、今では地域一の幼稚園と評判になっています。

幼稚園事情

都市コロンボは発展しています。もちろん物価も高くなって生活が大変です。そんな中でもお金に糸目をつけずに、幼稚園に通わせる親が増えています。月謝の高いところが良い教育をしていると言う親もいます。スリランカの人たちは子どもを可愛がり教育にも熱心です。将来のためによりよい学校にいれようとする風潮は、日本とよく似ています。こんな親の心をうまく挿んで、幼稚園も商売になっています。英語教育を売りものに、園庭のない場所でも繁盛しているのは驚きです。

政府の規制も少なく、誰もが始められる幼児教育分

野へは、内外のNGOや個人による支援活動も活発です。日本のように施設の規模が大きなものから、近郊の子ども数人を集めて家の一部で教えているもの、地域の集会所を利用したもの、またはお寺の一角を開放しているものなどさまざまです。しかしこれらの幼稚園は横のつながりが希薄です。それでも近年政府が幼児教育に力を入れ、各地で保育者のために研修会を開催しているのは嬉しいことです。でも僻地には情報が入らなかつたり、会場が遠く交通費や時間を作り出せずに参加できないこともあります。また、一過性のイベントのような研修会ではなく、もつと地域に根づいた継続する形の交流ができないものかと考えました。

研修会

せっかくの研修会ですから、保育者が一人でも多く参加できるようにと、僻地に出かけていって研修会を開き、孤軍奮闘している保育者たちのネットワークを

作りました。「遠くの親戚より近くの他人」という言葉があるスリランカですから説明は簡単。地域でまると、個人の持っている保育のアイデアを交換し、子どもたちのためによりよい学びの環境づくりをすることを目的に、研修会を始めました。

一九九六年、南部農村地区エンピリピティヤの保育者対象に第一回の研修会をしました。保育者は収入が少ないこともあって社会的地位は低く、職業にプライドを持つことは稀でした。そんな保育者たちに胸をはって「私は幼稚園の先生よ」と言ってみてほしい、「誇れる大切な仕事をしているんだ」という気持ちを持つてほしくて、保育者に焦点を当てた研修会をしました。みんなが講師になつて教えあうのです。恥ずかしがつていた保育者も発表が始まり、しばらくすると少しずつ胸をはってくるのがわかります。昨年六年ぶりに同じ会場で研修会を開きましたが、初めて研修会に参加したときの、あのおどおどした様子はまるでな

く、地域に根付いた保育者の自信に満ちた顔が並んでいました。とてもすてきな光景でした。

小規模貸し付け

幼稚園は資金難です。研修会で保育技術を磨くことはできませんが、保育者の給料もままならない状況では、備品や教材に使えるお金はありません。父母や近くのお店やさんにお願ひして集めた空き箱や王冠で教材作りなどしていますが、備品を揃える資金は捻出できません。そこで、少額の資金を貸し出すことにしました。収入の少ない幼稚園に対し、保育環境の向上を目的に、五〇〇〇ルビー（約六〇〇〇円）を貸し付けました。返済方法を確認し、審査に通った二十三園は二年間で予定どおり返済しました。机や椅子を揃えた園、ロッカーを買った園、そしてブランコとシーソーをつけた園は予算オーバーでしたが、嬉しい事に地域の有力者が足りない分を負担してくれたそうです。



▲ ジャックフルーツの葉でかんむり遊び
コロンボ郊外のパーリヤゴダ地区のスランガニ幼稚園で

地区連合組織

貸し付け返済は地区全体に責任を持たせたため、保育者も会う機会が増えて情報も行き来するようになりました。そしてもつと連帯を強くできたら保育者も元気になって、元気な保育ができるはずと思いいグループ作りを始めました。単独で役所に掛け合っても相手にされませんが、まとまると無視することはできないからです。

二〇〇三年、五地区で幼稚園連合が組織されています。二五〇程の園が研修や訪問などを通して子どもたちの学びの環境づくりに取り組んでいます。幼稚園連合はスモール・グループから成り立っています。このグループは、気心の知れた連絡の取りやすい近隣の幼稚園が五から九園集まったものです。グループで合同運動会をしたり、園の訪問を通して活発に活動しています。時には保育者の底力を見せつけられることもあ

ります。例えばある園では、選挙前に票集めのため立候補者から救急箱の寄付がありました。こういったことはスリランカではよくあるのですが、もらった保育者はグループの皆に連絡して、皆でもう一度もらいに行きました。いまでは七つの幼稚園全部に救急箱が備わっています。また、月に一度の集まりで少額のお金を集めているのですが、まとまったところで皆で銀行にいきました。「この銀行を使うから子どもたちのためになができますか？」と尋ねたところ、銀行の宣伝をさせてもらえば、年度末にプレゼントを用意するという約束をしてくれたそうです。なかなか頼もしい保育者たちです。

絵本箱

保育者の連帯づくりも安定してきたので、昨年子どもたちの手に絵本を届ける「絵本箱アリペンチャ（ちいさなゾウさん）」事業を始めました。移動式の絵本



▲研修会で踊る先生たち 南部農村地区のエンピリピティアで

箱には二十五冊のスリランカの絵本が入っていて、貸し出したグループ内を一ヶ月ずつ巡回します。週に一度は子どもが好きな本を選んで家庭へと持ち帰ることができます。絵本と共に感想ノートを渡しますが、様々な言葉が綴られています。「絵を見て自分で話をつくる」「主人公になって遊ぶ」「結末を変えてしまおう」など想像力を膨らませる子どもたちのこと。「お父さんのおなかの上で本をよんでもらった」「近所のこどもがきて一緒に読んだ」「おばあちゃんに読んでもらった」など家族や地区のつながりを深めることにも一役買っていること。「本の貸し出しの日は自分で支度をする」「貸し出しバックを市場にもっていく」として、子どもに叱られた」「牛のお父さんには角があるけど、ぼくのお父さんにはどうしてないの?」などなど、微笑ましい感想もありました。

途上国は一般に幼児にあった絵本や本が少なく、あっても比較的高価です。幼児に届ける絵本は、その

国の文化や環境から生まれたもの、そして楽しいものであってほしい。絵本箱に入れる本は、子どもたちに好評な「絵の多い」ものが理想です。絵本を探しにスタッフは本屋さんに足しげく通い、作家の家を訪ねていますが、残念ながらまだまだ文字ばかりの目立つ、ところどころに挿し絵が描かれているものが半数以上です。

スリランカの絵本出版は近年その数をぐんと増やしています。しかし、文字が多くなければ本ではない、教訓が含まれていなければいけないなど、絵本への認識はまだ浅いのですが、熱心な作家や出版社とともに良質の絵本を作り出す方法を考えるのも今後の課題です。

共に生きる

途上国というと「弱い、貧しい」というイメージがまだあり、国力や経済力の差が人と人の関係を位置づ

けることがあります。そして、支援活動というと「与える」と結びつきがちです。人々の持っている力やその国で生きていた経験を考えず、私たち外の者がよかれと思う活動をしてしまうことがあります。結果、一方的に与えるばかり受けるばかりの関係になってしまいます。誰でももらうことは嬉しいので喜んで受けますが、同時に保育者たちの持っている力を引き出す環境を作ってあげることが大切なことと思えます。そして自国の文化を大切にしたい、子どもたちの環境から生まれた保育をみなで作っていくのです。これは、子どもと私たち大人との関係そのものです。間違えたっていい、ゆっくりでいい、一人一人の力を信じて待つ。投げた石の波紋がゆっくりと広がっていくのが見えています。

(元青年海外協力隊幼稚園教諭隊員
NGOスランガニ基金代表)

手づくり活動の楽しさ

すばらしさ(5)

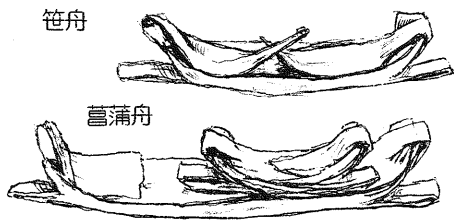
浜本昌宏

笹舟・菖蒲舟・

水あそび

子どもたちは、水あそびが大好きです。

お風呂の洗い場で、飽きることなく水をくんだり、流したり。プールではキヤツキヤツと歓声をあげて、水をかけ合ったりします。

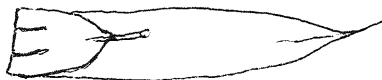


ジャブジャブという音や手にやさしい感触が嬉しく、水と戯れることで手加減や、思いをひろげていきます。

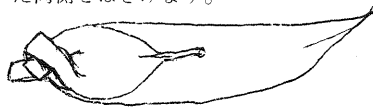
そんな水あそびの発展として、笹の葉など細長い葉で、舟をつくり、浮かべてあそびましょう。

笹舟

①図のように先端を折り曲げ、三つに割きます。

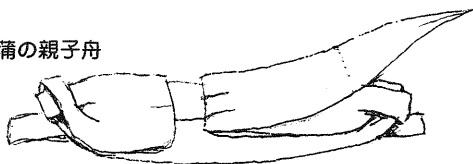


②割いた両側をはさみます。



③反対側も折って同じようにはさみ、上図のように完成。

菖蒲の親子舟



笹舟と途中まで同じ。その続きを同じように折っていく。

お風呂に入る時、浮かべてあそぶとよいでしょう。近くに小川があれば、流れに乗せてやりましょう。

* あやめ・甘草・葦の葉などでも出来そうです。

(元三重大学)

チヂキの母のつらさ

菊地 知子

「ババドビドゥー」。呪文よろしくそんな言葉を繰り返して叫びながら、彼は会議室から広い廊下へ出てきた。出てきた、という表現はあまり適切ではない。彼の意志でないことは明らかだ。顔を涙と鼻水とよだれで高湿度に保ちながら、二歳台後半とおぼしき彼は、母親に「連行」されてきたのである。「もう。いつでもこうなんだからっ」と、憤懣やるかた無しといった風の母親は、「ババドビドゥー」に負けじと、「だから、ママはシートのところでは見れないの。みんなママと離れてシートの上で見てるでしょ」とたたみかけ

る。彼の泣き方は、さらに激しさを増す。

その日私は、友人に頼まれ、親子向けの催しの会場整理を手伝っていた。立派過ぎる程の公共施設をまるごと会場として、劇や紙芝居、その他のパフォーマンスを、二日にわたって一挙上演するという催しである。その日の午前中は、その催しとは全く無縁の、地域行事に参加していた。「何が悲しくて、昼食も取れぬままこんな「かりだされ人生」を送っているのだから」と我とわが身を呪いながら、次なる会場へと急ぐ。大幅遅刻は必至であるが、おそらくは既にすべて

事足りてであろうから、あわよくば授乳室兼乳児の爲の部屋で、「あおくんときいろちゃん」でも広げながら気ままにやろう、などと目論んでいた。だがしかし、目論見通りになどいくべくもないことは、会場に着くや明らかになつた。会場は、親子連れでごつた返している。入るべき部屋に入れば、必ずや救いがあるということ、子の手を引いて彷徨^{さまよ}える母親（あるいは父や、じじばば）に、一刻も早く伝えかつ正しき場所へ導くという任務が、今を遅しと私を待っていた。正直なところ、この光景に腰が引けたが、これを取りかかった船というのだから、ややッやけっぱちで、任務に就いた。収容人数五十名かそれ以上とおぼしき会議室の前で、もうすぐ始まるとういう学生サークルのパネルシアターへと人々を誘^{いび}い、じきに会場内の照明も落とされようというときに、件の母親が、小さな男の子を羽交い締めにして引きずるような格好で、廊下に出てきたのである。

そのような状況下で、男の子の発する「ババドビ

ドゥー」が、「ママと見るー」であることは、わかるところでさして自慢にはなるまいし、確認し合える相手もなく、原文に濁点を付けて実際に呟いて確かめるにとどめた。そして、その場は会場係として職務を全うすべく、やおら二人に近づき、穏やかに「お膝で見せてあげてもいいのよ」と切り出し、「お母さんと離れて前の方で見たい子はそれでもいいですよってことだから」云々と続けた。しかし、母親はかえって頑なに、私にはなく男の子に向かつて、「お友達は前のシートに座つて見てねって、マイクの人が言つたでしょ。みんなちゃんと座つて見てたでしょ。ちっちゃい赤ちゃんじゃないんだから、ちゃんと一人で座れないなら見なくていいです」と、挙げ句はますます調で言い放ち、「どうするの？ 見なくていいのね？」と追い打ちをかける。（そりゃ見たいよねえ、かつこ、ママのおひざで）と心の中で呟き、劇やお話を楽しみにして母子でわざわざ出向いておきながら、おそらくは何一つ見ずに帰るであろう二人を予感した。

会場内には、連れて来てくれた大人の方など一顧だにせず、子ども用に敷かれたシートへと転び乗る子もいれば、やや後方で、母親の膝の上で見ようという子ももちろんいる。その母親が言うように、彼は「ちっちゃい赤ちゃん」ではないかもしれないが、傍目にはまだ十分に小さく、膝の上はまだまだお似合いだ。出し物を、親子で楽しむことがこのイベントの第一義であるから、マイクの人、すなわち進行役が、そうとやかく細かいことを言ったとも思えない。「みんな」という言葉で括れるほど、会場内の観客は一樣ではないはずだ；異を唱えることに何の困難もないくらい、母親の言葉ひとつひとつは、説得力に欠けている。それでも私はそれ以上、この母親に改心を迫ることをよしとしなかった。自分のお節介を愛情と呼ぶのはおこがましいし、好意というところか揶揄的な臭いが漂うが、いずれにせよ、そういった他者から発せられるものに応じ、受けとめる気持ちを今、相手の中に見出すには、この場はむずかしいと感じたからだ。代わ

りに私は、いつしか母子が座っていた通路のソファと一緒に座り、男の子の膝や腕などを少しずつ触りながら、指遊びや手遊びなどをして呑気に過ごした。いつまた自分の手や足に侵入してくるやもしれぬ私の指先を熱心に目で追いながら、男の子は何度も「くつくつく」と喉の奥で笑い、そのうち「キャッキヤ」と声を上げて笑い出した。子どもは膝をくすぐるようには、母親の心はくすぐれないことについては、私はいささか諦観気味であったが、たとえこの母子が、この後自宅へ直行したとしても、笑顔で過ごす時間に多少なりとも与ることができたことは、やはり嬉しいことであつた。

少し離れたところでこの出来事を見るときもなしに見ていた、やや年配の会場スタッフの女性二人が、母子の立ち去ったところに現れ、「一緒に見てあげればいいのにねえ。自分で自分を縛っちゃうんだわね、ああいう人って」「せっかくわざわざ連れてきたのにねえ」と、さも勿体ないという口調で言った。「ほんとうに」

と答えつつも、実のところ私は、この母親を非難する気持ちなど、自分が一向に持ち合わせていないことに気づいていた。母子の日常の背後にあるものは全くわからない。それでも、「いつでもこうなんだから」との言葉が垣間見えるように、いつもいつもママにくっついて離れないであろう二歳児を、陰に籠もって虐待することもなく、親子のためにとかなり作爲的に仕組まれたこんな場に、いそいそと出てきた彼女を、責める気になれなかつた。

自然発生的に子どもが集い、遊べる場は、よほどラッキーな例外を除いては、悲しいかな、今の日本には無いとわかっていい。これは、こと就園前の子どもにとつては致命的である。公園デビューという、ギョーカイ用語の如き大仰かつ侮蔑的な言葉が罷り通ることで「公園に行けば誰かが居るかもしれないし、一緒に遊べるかもしれないねー」などと思える屈託の無さは、とつくに過去のものになってしまった。もとより路地裏で気ままに遊ぶなど、望むべくもない。あつた

ところで、「路地裏デビュー」なる言葉でがんじがらめにされるのがオチである。乳幼児期の子どもにも、それに寄り添う者にも必要不可欠であるはずのコミュニティケーションの場として、育児サークルの類に活路を見出す流れは、かなり理のあることと思うが、既成のそれにアプローチすること自体、行き場のない親にとつて新たな壁となりうるのだと、育児相談を仕事とする友人に聞いて、さもありなんと思つた。さらには、かなり自然発生に近い形で伸びやかに活動をしてきたサークルで、連絡係に端を発したはずのリーダーのバトンタッチが困難になり、何処ぞのPTAよろしく、どろどろの人選劇を繰り広げているといった話も、人為的に作られた集まりの宿命というものかもしれない。



れないと、妙に納得がいつてしまう。

それでも、と私は思う。子どもとの生活に、子ども、大人を問わず大いに巻き込みかつ巻き込まれて過ごすことこそが、子どもたちの嬉しさや優しさを育ててくれる、と。右のような状況に限らず矛盾はおそらく多々あるし、子ども同志の日常的な「やった、やられた」、時としてそれに伴う他者への憎悪、憎悪するわが身への嫌悪感、心ない噂話に翻弄される経験など、^{ひる}怯む要素を挙げ連ねればきりが無い。それでもやはり、自分が何とかしなければならぬ子どもとの日々の局面で、否、正確には、自分だけで何とかしなければならぬと思ひ込まれているあらゆる局面で、羅針盤を持ち得ず、ひとり方向を見失っていくよりずっといい。自分が、それと意識しているか否かにかかわらず頼りを持たぬ存在である時、理解しがたい頑なさで自らの心を被ってしまうことは、決して稀ではないことは、我が身に置き換えてもわかる。多くを一人で背負っていると思うが故に、脆弱な心で気丈に

振る舞い、どうでもいい類のことに躍起になる。親切も、心配も、ましてや叱責も、心に届かない。他者とのあるいは他者からのあれこれを、「よかったね」「嬉しいね」と共に受けとめることなく過ごせば、傍らの子どもも又確実に、愛情をキャッチする能力を低くする。

欲を言うなら、子を育てる世代であるか否か、子どもに関わる仕事をしているか否かにかかわらずたくさんの人を巻き込んで、「応援すること・されること」が緩やかか包囲網をつくり、子どもと、子どもを育てる人々を包み込めれば、とてもいいと思うのだが、そこには遠く至らずとも、やはり、ひとりひとり小さな連携から地道に始めるしかない。子育て代行と限りなくイコールであるところの「いわゆる」子育て支援の大会合からは、少し離れたところに身を置きたいものだと願いながら、たかだか月に一回程度だが自宅を開放してささやかな文庫を始めたのも、小さな子どもを持つ親に、楽しく子育てをしてほしい、その楽しさを共

有させてほしいという思いからであった。まさしく支え支えられてきた、私自身の子育ての同行者ともいえる友人を相棒に、集いやすさを考えて「ひだまり文庫」と名乗り、絵本を読んだりはそのが、彼女も私も、多少活字中毒の気はあるものの、無類の本好きというわけでは決してない。絵本は確かに多くの示唆を与えてくれるし、時に心底楽しいが、絵本を読むことだけで非常に多くの事が解決するように考えるような一部の流行には、懐疑的である。絵本はいわば口実で、なるべくのどかに、気ままに、お茶を飲んだりお喋りしたりできることを、むしろ大切にしている。育児を担うおばあちゃんが、孫を連れて集ってくれることがあることも、世代の枠を広げてくれてありがたい。小さき者への愛しさも、ひとしおの感がある。

「ここに来る子たちは実は、ここに来なくても大丈夫な子たちばかりなんだよねえ。お母さんたちも然りだけ」と、自虐的に矛盾をつけて二人で苦笑しつつも、無邪気に「楽しかった」「気持ち良かった」等と

喜ばれることを喜びにして、また二人で張り切って、互いの暦の空きを探すのだった。

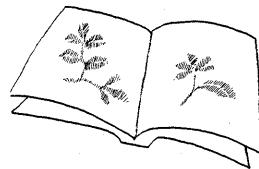
子どもの傍らで生きる生活のどこかで、その子を見、知り、抱きしめたり食べさせたり、たまには本を読んだり、その子のために泣いたり怒ったりする人が、なんだかんだ自分以外にもいると知ると、他者との多少の見解の相違など何のその、自分もその子もその“応援”を甘受して生かされていると実感することにつながっていく。そして自らも、なぜか俄然はりきって、子どもや子を育てる者の、楽しい気持ち、嬉しい気持ちを育むことに、何とか一枚加わろうとするようになるのではないだろうか。そんな連鎖反応に今、密かな期待を持っている。

(松戸・ひだまり文庫)

特集 へ緑蔭図書紹介へ

あなたがいるってことだけで

倉持 清美



私が母親になってから十年がたつが、その間に子ども達にいろいろな絵本を読み聞かせてきた。そんな中で、子どものために買った絵本が、いつの間にか自分にとって大切な絵本になったりする。ここでも取り上げる絵本は、そんな絵本の中の一つである。『まっつてね』はシャーロット・ゾロトワというア

メリカの作家によって書かれた絵本である。彼女は一九一五年にヴァージニア州で生まれ、ニューヨーク郊外の豊かな自然の中で育った。他にも、『しあわせのモミの木』『いまがたのしいもん』など、みらい・なな訳で、たくさん絵本を書いている。子どもとの交流、自然との交流の中で作品を立ち上げ

たと想像できるような、とてもほのぼのした気分になる作風を持っている。

『まっつてね』は、幼稚園年少から年長くらいの子さい女の子が主人公である。結婚したお姉さんが里帰りしたとき、何でもできるのに驚いた女の子が、母親に大きくなり、何でもできるようになるまでまっつてねと、話しかける内容である。例えば、

「いまにねえさんみたいになって」「じゅうたんにパンくずをおとさないし」「かあさんのびんせんをかっつてにつかわない」「つぎからつぎにスカーフをだしたり」「ネックレスをつけてみたりしないのよ」

「ふとんに、マーカーをつけちゃったり」「デザイナーをつまみぐいしないし、うえきばちをけとばさないわ。」と言っていく。これまでさんざん母親に注意されたことをあげているのだろう。そして、「だからまっつてね。きつといるんなことができるひとになっつてかあさんにあいにくるわ」。それに対し母

親が続けて、「まっつてるわ、あいたくなっつたらいつでもきてね」「いまはうえきばちをたおしたり」「できないことがたくさんあるけど」「ちゃんとできるよようになるのね。なんてうれいんでしょ」。あなたがいるってことだけで、かあさん、しあわせなのに」という。小さい女の子は、それを聞くと、「わあーい」と歓声を上げて母親に抱きつく。その場面で絵本は終わっている。

この絵本を読んでいつも思い出すのは、研究仲間が立ち上げているネット上の子育て相談に寄せられたメールである。おおよそ次のような内容であった。「私は外向的でなく友達を作るのが苦手です。夫は子どもにはたくさん友達を作ることが大切だという。私も、子どもには同年齢の子どもと遊ぶことが大切だと考えています。今から公園に出かけていって、子どもと同年齢の友達を作るには、どうしたらよいでしょうか」。この相談内容を見て、子ど

もの年齢をどれくらいだと思うだろうか。私は、公園に行くことを考えているのだから、そろそろ自分で移動ができる年齢、一歳前後ではないだろうかと思っていた。しかし、相談者の子どもは、四ヶ月の赤ちゃんだったのである。このくらいの赤ちゃんなら、お友達を作ることよりも、母親や父親など養育者との関係をしっかりと作ることがまず大切になる。それを、子どもの成長の先の先を読み、今の子どもの実態とそぐわない相談をしてくる親が時々いる。子どもの成長を早く早くと望んでいるような気がしてならない。この相談者は、さらに子どもの知的発達を促すおもちゃとしてどのようなものを購入すればよいのかも尋ねてきた。目の前にいる子どもと、しっかりと向き合えないままの生活をしているのかと思うと、心が痛くなってくるような相談であった。

確かに、子どもを育てることは、子どもが自立して社会に出ていけるようにしていくことだろう。

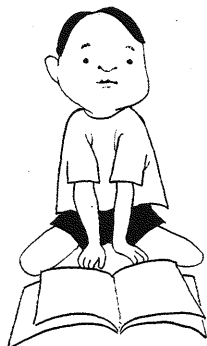
『まっけてね』のお母さんが子どもの、いろいろなできるようになるからまっけてねということばに対して、「ちゃんとできるようにするのね、なんてうれしいうんでしよう」と応える気持ちは、子育て中の母親にとつて共感できるものだろう。自分でご飯を食べ、自分でお風呂に入つて、部屋を汚さずに使つてくれるようになる、なんてすばらしいことか、と。でも、今だつて大変だけど幸せな気分も感じているのはどうしてだろう。それはまさに、小さい女の子のお母さんが言う「あなたがいるってことだけで、かあさん、しあわせなのに」ということなのだろう。いろんなことが上手にできないけれど、あなたの存在そのものが私の幸せと感じられることで、子育て中の母親はいろいろな困難を乗り越えることができるのだ。ただ、そうした幸せを感じるためには、母親に余裕がなくてはいけない。先ほどの相談者のように、夫までが「子どもに友達が必要だか

ら」と母親に公園へ行けという圧力をかけてくるようでは、なかなか子どもと今の生活を楽しむゆとりが生まれてこない。

ひるがえって、私自身はどうだろう。子どもが寝てしまってから帰宅すると、部屋中滅茶苦茶でひどくがっかりする時がある。疲れて帰ってきて、部屋も片づけなくてはならないのか、と思うといらいらもしてくる。最初はこんなに散らかして、と、読み散らかした絵本や描きかけの絵などを片づけているが、次第に、今日はお店やさんごっこをお姉ちゃんとしたのだな、とか、この絵本は良く読んでいるな、とか、自分のいないところでの子どもの生活が見えてくる。片づけているうちに、子どもの生活の断片を拾い集めている様相になり、それをつなぎ合わせて子どもの様子を思い浮かべてくすくす笑ったりしている自分に気がつく。そして、子どもの寝顔を見に行き、柔らかい頬に触れたりすると、「あな

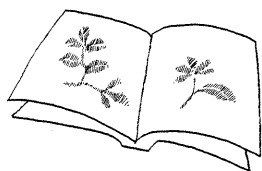
た達がいるだけで幸せ」という気分になってくる。私にはまだそう思えるだけのゆとりがある、ということがわかると、自分に安心したりもする。『まっけてね』はそのことの大切さを私に教えてくれる絵本である。

(学芸大学)



『心理学ってどんなもの』 『ソラリスの陽のもとに』

山本 政人



何を今さらと思われるかもしれない。曲りなりに
も心理学をやっている、それを教えることを生業と
していながら、今もって「心理学とは何か」悩んで
いる。

タイトルが「心理学とは何か」ではなく、『心理
学ってどんなもの』（海保博之著、岩波ジュニア新
書）であることに重要な意味がある。単に中高生向

けにそういうタイトルにしたのではないと思う。私
ごときが言うのは僭越の極みだが、「心理学とは何
か」を語ることはおそらく誰にもできまい。辛うじ
て「どんなものか」を語ることはできるかもしれな
い。それをうまく語られた本だと思う。流石と言っ
べきである。

それから岩波ジュニア新書全般に言えることだ

が、非常にレベルが高い。中高生向けと言うが、大学生でも社会人でも、十分読み応えがある。本家の新書よりもレベルは高いのでないかと思う。深く考えてみると、中高生が一番勉強する時だから、レベルの高いものはむしろふさわしいかもしれない。あるいは本家の新書の方が高齢者向けになっていて、大学生も三十代、四十代もまだジュニアだから、ジュニア新書という呼称は正しいのかもしれない。とにかく大学生も三十代、四十代も読むにふさわしいシリーズである。

内容はと言うと、一見硬そうで、やはりちよつと硬い。でも読みやすい。心理学の知識を簡潔にまとめてある。そして単なる知識の羅列ではなく、心理学の見方、考え方がしっかりと書かれていて、ちゃんと勉強してこなかった私にはとても勉強になった。それにしてもいろいろな心理学があつて、「心理学とは何か」という問い自体が意味を持たないと改め

て思った。つまり「あんなものもあるし、こんなものもある」のが心理学なのである。そもそも「心とは何か」という根本的な問いに対する答えがまちまちなだけだから無理もない。

この「心とは何か」という問題については、本書では精神分析やゲシュタルト心理学において細々と研究が行われてきたとされている。ところが二〇世紀後半になって、この問題は一気に心理学のメインテーマとなる。認知心理学の台頭によるのだが、認知心理学の関心は、人間の認知から人工知能やコンピュータにも心を持たせることができるかということに移っていく。人間がコンピュータに心を感じたとしても、それは人間の心と同じなのか。永遠に答えは出ないのではなからうか。

このテーマは昔からよくSFで扱われてきた。有名なところでは、『二〇〇一年宇宙の旅』のスーパーコンピュータ「HAL9000」がある。『HAL

9000」は自我に目覚め、人間に対して反乱を起こす。また、「鉄腕アトム」はロボットだが心を持っている。人間よりもよほど人間らしい心である。

心理学から強引にSFへつないだのは、『ソラリス』のことを書きたかったためである。すでに映画が公開されているはずだが、楽しみなのである。確か私が大学に入った頃、タルコフスキー監督の映画『惑星ソラリス』が話題になっていた。原作はスタニスワフ・レムの『ソラリスの陽のもとに』（スタニスワフ・レム著、ハヤカワ文庫）であるが、私には映画より原作の方が面白かった。

惑星ソラリスは表面をゼリー状の海に被われている。その海はどうやら生きているらしく、しかもかなり高度な知性を持っているらしい。人間はこの不可解な海に放射線を当ててみる。すると海は…。

この小説のテーマは、未知の対象と出会った時、人間が何を考え、どのように振舞うかということ

ある。お決まりのパターンだが、人間はいつも未知の対象に対して乱暴なことをしてしまふ。そして相手からのリアクションがあり、しばらくの応酬の後に、次第に相互理解が生まれる。というのが小説の筋だが、私たちの現実の世界では、未知の対象でもないのに応酬は限りなく続き、理解はなかなか生まれない。

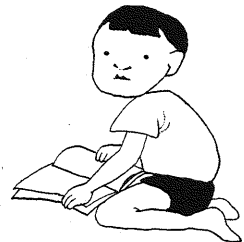
『ソラリス』の主人公は心理学者ということになっていて、他の科学者たちはソラリスの海をあくまで分析の対象、つまり物としか見ないのに、主人公は海が意志を持つと考え、理解しようとする。この姿勢は「アニミズム」とも言えるが、この姿勢こそ他者を理解するために重要なものではなからうか。さらに言えば、心理学者とは、対象を分析することよりも、対象の知性や意志を感じ取ることに長けた者である、と小説ではなっているのだが…。

(学習院大学)

読書・無限に広がる

想像の世界がそこに……

安西 三恵



現代の読書事情

気がつくと「本を読む」、から随分遠のいてしまった自分に驚きます。幼い頃、読書好き少女だったのに……。何故かなと考えると、もちろん大人になり日常に追われ時間がないこともあるのでしょう。でもそれだけではなく「読む」ことから遠

ざかる要因が多い今日の現実なのかもしれません。視覚的に知識が入ってくるが多くなり、それに慣れた現代人にとって、じっくり読書などといった「読む」ということが、極端に言えば、非合理的趣向となってしまうのかもしれない。それは大人だけでなく、習い事に追われる子どもたちにも残念ながら影響している気がします。

本を読むこと、想像すること

私は七人姉弟の三番目、親から目が届くような届かないような微妙なところをいいことにのびのびとした幼児期を過ごしました。でも当時の母親族がそうだったように、我が家の母も大変な教育ママでいつも勉強！ 勉強！ そんな母が姉の勉強のために買った『少年少女世界名作全集』が私の読書三昧の始まりなのは、今考えるとおかしなことです。幼児期のイソップ、グリム、アンデルセンに始まった本読みが、昨日はフランス編の「三銃士」、今日はイギリス編の「八十日間世界一周」、…中国編の「大地」…と。夢中で読んだ本で世界を旅し、その想像の世界にはまった私は、小学生時代に読むべきとされた本をほとんど読みあさりしました。毎日頭の中のホームシアターで自分だけの世界を楽しんでいました。そんな私の今でも忘れられない本が『ああ無常』です。夜、読み終えるまで寝られず、朝方ベツ

トで枕が濡れるほど泣いたのを昨日のこのように覚えています。不思議なことに、ストーリーははっきり覚えていないのに、自分が受けた衝撃とか、感情の動きは驚くほど良く覚えていました。しくしくではなく、おおいと肩を震わせ咽び泣いたのです。ジャン・バルジャンがかわいそうで、かわいそうで……。

心をいっぱい震わせたこと、ポップコーン片手にはいかなけれど、頭の中のホームシアターで世界を旅し想像をふくらませたこと、今でも思い出すと心が揺れるそんな想像の世界を持てたことが、その後の私の生活で内面的に大きな影響を与えていることを私は確信しています。読んで想像する、熟慮する……といういかにも単純なことが難しくなっている現代社会です。時代の流れの中で生まれる物、消え行く物があるのはしかたがないことと言つてしまえばそれまでなのかもしれません。でも人間社会が今日まで発展してきた根本にある夢を持つ力、想

像する力、そして目的を持つ力を育む幼児期の豊かな時間の中で、是非本を読むことを忘れないで欲しいです。そのきっかけとなるどんなささやかなことでも大切に育てていって欲しいです。

今人気の本

最近人気の「ハリーポッター」は久々に子どもたちの間で盛んに読まれているイギリスのファンタジーの世界。昔から魔法は子どもに人気の世界です。私はメリーポピンズに憧れ、いつの日か我が家にも来てくれないかと願ったものです。子どもたちの間に広まった本を読むこの機会を次の本へとつなげていってくださることを願っています。意外なことに、この本は最近の字が少なく、絵の多い本とちがい挿絵がほとんどありません。正直、映像に慣れてしまっている今の子どもたちに絵のない本はきつひはず。そんな本が子どもたちに受け入れられたことはとても嬉しいです。私の読書の一番の楽しみは十

ページ以上先にある小さな挿絵を見ることで、自分が想像したものとそっくりだったりすると密かな喜びを感じたものです。これからも娯楽が一杯の今の時代の子どもの引き付けてくれる素敵な本がどんどん出てきてくれることを期待したいです。そしてそれが読書へのきっかけとなってくれたらと思っています。

私のデザインルーム

手芸、工芸など分野を問わず「作る」ことが大好きな私はこんな物が欲しい、こんな物を持ちたいという皆さんの物作りのお手伝いをしています。それぞれの方たちの思いを形にする時、幼い頃に読書で作った頭の中のホームシアターを今では物を作る時のデザインルームとして利用しています。そしてまた……今でも……ヘンデルとグレーテルのお菓子の家を食べてみたい！と思いい、赤毛のアンは、まさに私だ！と自分を重ねていた幼い頃の私が、

頭の中で色々な想像をめぐらし物作りをする時の私
を手伝ってくれている気がしています。

(工房さく主宰)

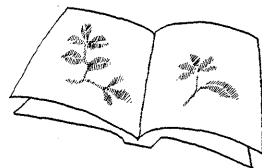
三木成夫著 『胎児の世界』

第Ⅱ章より

磯貝 文男

この本『胎児の世界』（中公新書）は一九八三年
出版で、新しいものではありません。また、その内
容も育児書ではありません。著者・三木成夫氏は人
ぞ知る解剖学者です。「個体発生は宗族発生（系統

発生）を繰り返す」という反復説または進化再演説
（E・H・ヘッケル、一八六六）をご自身のしごと
（ニワトリの胚の発生の研究）で実証され、地球の
歴史や生物進化をふまえた比較解剖学の立場からさ



まざま論を進められました。

三木先生の業績や考えについては、すでに本誌に掲載された「三木成夫といのちの世界」で、東京女子医大の吉増克實先生によって、専門的にくわしく紹介されています。ここでは場違いかつ不勉強を省みず、『胎児の世界』の中で私が興味をもった第Ⅱ章を中心に感想などを書いてみます。

私は高校生の頃、授業で聴いた反復説に興味をもち、その後地学関係に進みましたが、知識や経験が広がっていく中でいつもどこかにひっかかっています。本書にも登場するJ・ニードムのしごと（一九三二）を学生の頃の読書会で知った時もあるほどとは思いましたが、本書の第Ⅱ章を読んで目がさめた思いがしました。時間軸の二一日に重ねて地球の歴史の時間軸がとってあったからです。

第Ⅱ章は、温められ始めて四日目頃のニワトリの卵（胚）が息も絶え絶えに弱った後、回復して再び

発生を続けることをもとに展開されます。この四日目のできごとを養鶏業者などは経験的に「常識」にしているようですが、先生はこのできごとがもつ興味を、生物進化・比較解剖学の研究者の眼から解きあかします。

当時先生は、ニワトリの胚を使って血管系や脾臓の発生・発育を独自の方法で研究していました。四日目が終わる頃、卵は弱りしことはうまく進まなくなりません。この原因を、胚がこの時期に約三億年前の先祖の体験を再体験するため、と先生はいいます。三億年前の体験とは、天変地異（バリスカン造山運動 註）による環境変化にともない、水中生活を陸上生活に変えた「上陸」という生活様式の大変革です。先祖は長い間水辺で、日照り、風雪、水没、乾燥、気温、水温の変化、恐ろしい害敵などの厳しい試練に耐え、およそ一億年かかって陸上で生活できる体のつくりを備えた生物に生まれ変わります。

した（先生は四日目頃、胚の脾臓が陸上生物型に変わることを確かめています）。

四日目のできごとは、ニワトリという宗族の発生上の大事件ですし、また、子孫は先祖の体験を繰り返しながら生まれてくることになりますから、個体発生と宗族（系統）発生を結びつける重要な手がありましたのです。

このことに気づいた先生の感激は大変なものだったようで、それは四日目を乗り切った胚の姿を見た時の驚きとともに、本書からも生々しく伝わってきます。

生物進化についてはさまざまな考えがあり、それに基づいた本が数多く出版されています。しかし、生物進化は地球の歴史の中で起こっているのに、それを地球の歴史上のできごとと結びつけた見方の考え方も本もあまり多くありません。しかも自分の観察をもとにしているものはほとんどありません。地

球と生物はお互いに影響し合いながら、ともに進化してきた（この関係は現在も変わりません）のですから、どちらか一方の変化だけを見たのでは片手落ちです。

胎児の世界は時間も空間も超越した世界のようにです。それはまた雄弁で、問い方しだいで何でも答えてくれるようです。私たちは胎児の世界の記憶（とくに意識しなくても体が憶えている感覚・習性など）をもとにもものを見、感じ、考えます。本書では胎児の世界を通して、原形と奇形、歴史的にものができていく順序とその論理性、記憶などについても先生の考えが述べられています。

私は最近まで高校の教師（地学）をしていました。地学にも現地調査を積み重ね、大地の生い立ちをさぐっていく分野があり、何万・何億年も前の大地のできごとを調べながら当時の動物や植物の世界にも思いを馳せます。また、過去の生物（古生物）

やそれが遺したものの・跡である化石を調べていく分野もあります（高校地学の内容は広く、天文・気象・海洋分野も含まれますが）。そのためと思われるが、第Ⅱ章の内容は、地学関係者にもわかりやすく、また興味深いものといえます。また、自分の観察から生物進化を貫く法則をとらえた感動、自分のしごとへの満足感、考えとしてまとめていく充実感などが伝わってきて、生意気なことですが、なぜか共感するものがあるのです。

私は地球の歴史や化石、また、化石を通して生物やその進化に興味をもっています。過去のできごとなどは現生の生物からも読みとれますが、絶滅した生物もあって、化石を直接調べることからも多くの情報が得られています。近年、化石を生物・物理・化学・医学の手法で研究することがさかんになり、多くの成果が挙がっています。

これからも地層や化石からの情報はもちろん、二

ワトリの卵の中に、ひいては私たちの体の中に、地球の歴史や生物の進化が息づいていることを、もっと勉強しながら伝えていきたいと思っています。

（元お茶の水女子大学附属高等学校）

註

パリスカン造山運動・およそ三億年前の石炭紀を中心に起こった汎世界的な造山運動。ヘルシニア造山運動ともよばれる。造山運動とは、たとえば、最近のアルプス造山運動によってアルプス・ヒマラヤ・ロッキー・アンデス山脈のような大褶曲山脈がつくられたといった大規模地殻変動。古生代以降約六億年間に、（古い方から）カレドニア・パリスカン・アルプスの三回の造山運動があった。なお、造山運動は最近、プレートとの生成・移動・衝突・沈み込みなどとの関連から議論されることが多い。

編集後記

初夏のさわやかな一日をある保育園で過ごしました。

朝、砂場に行ったときAは泣いていました。そこへHがやってきて、Aの手のひらへダンゴ虫を一つそつと置きました。しばらくすると、二人は手をつないで歩き始めていました。後をついて行く私に気づいたHは、「この子のダンゴ虫を探しているの」と言いました。ダンゴ虫がいる場所には先客がたくさんいて、私にはあと一匹さえもとても見つかりそうにもないのに、子どもたちは、水まき用の水栓の蓋を上げてみたり、隅っこのお土をどけてみたりして探していました。

倉橋惣三は、「小さい生きもの」の中で次のように書いています。

*

（子どもらは）小さいから見落とさというよりも、小さいから見落とさないのである。：草原に、葉の陰に、花の芯の奥に、なんとまあよく、小さい生きものを発見することか。それでもう既に科学的である。（『子どもの心とまなざしで』フレーベル館）

*

しばらくして見ると、Aは容器の中のダンゴ虫をじつと見つめています。Aが容器をふつてダンゴ虫が丸くなって動かなくなってしまうと、今度はその丸まったダンゴ虫をじつと見つめています。入園して日の浅いAは、その日初めてダンゴ虫に興味を持ったようでした。（仲）

幼児の教育

第一〇二巻 第八号

（二〇〇三年八月号）

定価五五〇円（本体五二四円）

発行 平成十五年八月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112-8610 東京都文京区大塚二丁目一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108-8520 東京都港区三田五丁目二丁目一

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113-8611 東京都文京区本駒込

六一一四一九

〒〇三二五三九五五五六一三（営業）

〒〇三二五三九五五五六一四（編集）

振替 〇〇一九〇二二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。



21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与える新シリーズ！

最新刊

編集委員 森上史朗（子どもと保育総合研究所代表）
柴崎正行（大妻女子大学教授）
柏女霊峰（淑徳大学教授）

21世紀保育ブックス⑬

子どもの健康を考える

保育に必要な小児保健の基礎知識



菅野悟郎 著（こどもの城小児保健クリニック）

成長・発達のある過程にある幼い子どもたちの健康を考えると、もう一度原点に戻ってみる必要があります。私たちが生物であるということを思い起こして、訪れる自然の変化、そして人とのふれあいの中で、子どもの発育、健康を整理してみる必要があるでしょう。本書は、子どもの健康について、子育ての中で知っていなければならない基本的なことから、考え方をやさしく述べています。保育者をはじめ、子育てに携わっているすべての方への確かな道しるべとなるものです。

B6判・200頁・定価：本体1,200円＋税

〈本書の内容〉

- 序章 生物としての子ども
- 第1章 子どもって何だろう？
- 第2章 〇・一・二歳児と三・四・五歳児
- 第3章 からだの働きを知ろう
- 第4章 子どもの発育と症状
- 第5章 アトピー性皮膚炎と乳幼児突然死症候群
- 終章 子どもと水

既刊本

- | | | | |
|-------------------|--------------|-------------------|---------------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 | ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真美・尾木まり 共著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女霊峰・山本真実 共著 | ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 | ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 | ⑩保育者が出会う発達問題 | 大塚幸夫・前原 寛 共著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 | ⑪保護者の要望をどう受けとめるか | 小笠原文孝 著 |
| ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 | ⑫保育所と幼稚園～統合の試みを探る | 吉田正幸 著 |

<以下続刊>

キンダーブックの
フレール館

0・1・2歳児の子どもたちが毎日潤いのある生活を送れるようにするための保育実技シリーズです

最新刊

0・1・2歳児の
赤ちゃんHOIKU実技シリーズ3

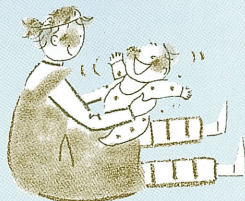
みんななかよし スキンシップ手あそび・歌あそび

乳幼児と過ごす時間にふさわしい
スキンシップな歌あそびを年齢別に紹介！



乳幼児にとって大切な安心感・安定感を与えるふれあい遊び歌をオリジナル曲、わらべうたの中から年齢別に紹介。0・1・2歳児の年齢別「遊び歌のポイント」のほか、子どもをひきこむ導入のヒントや発展のヒントなども多数掲載しています。一対一から集団まで、さまざまな遊び方にも対応。

乳幼児といっしょにうたったり踊ったりして、スキンシップを楽しむためのアイデア満載の一冊です。



鈴木みゆき 編著 AB判 96頁 本文2色刷り 定価：本体2,200円+税

【既刊】好評発売中！

0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ1

笑顔がいっぱい わくわく保育室

阿部 恵編著

0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ2

げんきわくわく 手づくりおもちゃ・プレゼント

阿部 恵編著

0・1・2歳児の赤ちゃんHOIKU実技シリーズ4

心を伝える おたよりアイデア 鈴木みゆき・原田留美編著

キンダーブックの
フレール館

くわしくはフレール館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。